

<b>Title</b>	「天人女房・七夕型」における日本と中国の男性像：結末の違いに注目して
<b>Author</b>	張, 宇
<b>Citation</b>	人文研究. 72 卷, p.147-159.
<b>Issue Date</b>	2021-03-31
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科
<b>Description</b>	野崎充彦教授：井狩幸男教授：大場茂明：池上知子教授 退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

## 「天人女房・七夕型」における日本と中国の男性像 — 結末の違いに注目して —

張 宇

日中の「天人女房」はいろいろな話型があるが、本稿は「天人女房・七夕型」を比較対象とし、特にその結末に焦点をあてた。日中の話では同様に「夫婦が一年に一回会う」ことになるが、物語の展開と細かい描写を踏まえて考察すると、日本の語り手は「天人女房・七夕型」を悲しげでネガティブな結末に描く傾向があるが、中国の場合は幸福感のあるポジティブな結末に描く傾向がある。この違いはそれぞれの男性登場人物の言動と関わっている。男性の言動に対する具体的な描写の比較を通して、日本では、不甲斐なく、愚かな、情けが薄い男性像が描き出され、中国では、勇敢な、情けを重んじる男性像が描き出されることが分かる。

### はじめに

「天人女房」は日中で広く知られ、伝承されている民話である。この話に関する研究において、類話の分布と伝承を主な研究対象とする研究は多くあるが、話の中の男女像に注目する研究はほとんどない。本稿は、主に、日本の『日本昔話通観』<sup>1)</sup>と中国の『中国民間故事集成』<sup>2)</sup>に収録された「天人女房・七夕型」を研究対象とし、その結末についての解釈を問い直すことを通じて男性像の違いを明らかにすることを目的とする。一般に「年に一度の再会」で日中の結末が同じだと解釈されているが、詳細に検討すると、同じ結末とは言えない。日本ではネガティブな結末になるが、中国ではポジティブな結末になる。この違いはそれぞれの男性の言動と関わっている。

民話は固定的ではなく、伝承過程において語り手により流動的に変化するものであるため、同話型の話でも細かい部分の描写が語り手によって異なり、話の細部まで含めて男女像を考察するのは困難である。この問題に対し、例えば黄地百合子は、「昔話に登場する女性像」という論文の中で、語り手が登場する女性をどのようなイメージで語っているかという視点に立ち、話の具体的な表現を見直すという方法で考察した<sup>3)</sup>。筆者はこの研究方法に立脚し、日中の「天人女房」における男性に焦点を定めて考察する。日中双方の話のなかで物語の展開に関わる男性の言動についての具体的な表現を比較することを通して、語り手がどのような男性像を描写しようとしたかについて明らかにしたい。

## 1. 民話における男女像の研究

日本における民話研究の関心は、伝承や系譜に向けられてきたので、男女像に注目する研究は少ない。「天人女房」に関する研究でも同様である。例えば、大久間喜一郎の「七夕説話伝承考察」<sup>4)</sup>は、主に日本の七夕伝説と中国との関係に着目している。篠田知和基は「「天人女房」と世界の類話」<sup>5)</sup>の中で、日本の「天人女房」と、中国の「牽牛織女」、世界的な「悪魔の娘」の関係を考察している。

しかし、近年では民話の中の男女に着目した研究も散見される。2010年に開催された日本昔話学会のシンポジウムで、野口芳子と川森博司が「昔話における男女像」<sup>6)</sup>についての研究を発表した。野口は、時代、文化によって性差、ジェンダーが異なるとするならば、昔話における男性と女性はどのような形式で表現されているかというテーマを設定した。野口は日本昔話の女性には、耐えて待つ女と自ら行動する女の両方の像が存在し、どちらを強調するかは語り手次第であると指摘した<sup>7)</sup>。川森は日本に実際に存在する昔話と「ありえない」昔話の比較を通して、日本昔話の中の女性と男性の関係をめぐるパターンの特徴をつかみ、日本昔話における耐えている受動的な女性と積極的な女性を考察した<sup>8)</sup>。また、2018年の日本昔話学会では、「女性と昔話」をテーマとしたシンポジウムが行われた。民話の中の男女を考察する研究は困難であるが、新しい課題であろう。これらの研究の中では、民話の中の男女像を考察するとき、語り手への考察も重要であると指摘されているが、具体的にどのように扱うかは述べられていない。また、「天人女房」について論じたものはまだない。

一方中国では、民話の中の男女に関する研究が日本より多く見られる。例えば、張方円の論文では、漢民族の四つの民間説話を研究対象として男性像がまとめられた。「孟姜女」の中には人夫として徴用され、妻と一緒に生活していない男、「白蛇伝」の中には愛情に疑惑を抱き、家庭と妻を守ることに消極的な男、「牛郎と織女」(天人女房・七夕型)の中には、牛に導かれて行動する牛郎、そして「梁山伯と祝英台」の中には将来のために愛情をあきらめた男性、以上の四つの型の男性が登場する。この四つの民間説話から見ると、男性の方が弱く、消極的になる傾向があると指摘されている<sup>9)</sup>。この研究では、愛情のために人間界に来て生活する織女と比べると、牛郎が牛の導きで織女と結婚し、愛情への熱意が感じ取れないので、牛郎が受動的で弱いイメージを表していると論じている。

日中の民話における男女像を比較した研究もある。張揚は「日中民間故事における異類婚姻譚の話の比較」<sup>10)</sup>の中で、求婚と別離のモチーフから日本と中国の男女像を比較考察している。日本の話では女性から求婚し、男性がタブーを破ることで女性がやむをえず夫と別離するのに対し、中国の話では、男性から求婚し、女性が社会に受け入れられないため夫と別離する。このことから、中国の場合は物語の展開上の役割が男性は積極的で、女性は消極的であるが、日

本の話ではこれが逆であると結論している。

張方円は牛によって結婚に導かれる牛郎に受動性を指摘しているが、後半で織姫を追って天に向かう牛郎の行動には、愛情の強さが見える。後半の分析が不十分であろう。張陽は、中国の話では男性から求婚するという理由で男性の積極的役割を指摘し、日本の場合は自ら求婚する女性を積極的としている。しかし、この解釈は「天人女房・七夕型」には当てはまらない。中国、日本、いずれの場合も男性が羽衣を隠すことが契機となって結婚が成立しており、男性が物語展開において積極的役割を担っていると言える。また、別離のモチーフに注目するなら、日本の場合は男性がタブーを破ることが原因で結婚が破綻する。これも話の展開を男性が推進したと解釈可能である。さらに、これらの先行研究では、いずれも語り手の意図を踏まえてはならず、人物の言動についての細かな表現に留意した比較はなされていない。

本稿では、上記の先行研究を踏まえたうえで、男性像をさらに詳細に検討する。張方円が考慮していない後半部分の男性の行動、そして張陽の指摘する物語展開に関わる登場人物の役割という観点に加え、語り手が描き出す具体的な表現を分析することを通じて男性像の違いを考察する。その際、中国と日本の「天人女房・七夕型」の結末の違いにまず注目し、その理由を男性の言動についての語り手の具体的な描写の比較分析を通して明らかにする。筋の展開やモチーフの比較からは見えてこない、語り手による細やかな男性像を浮き彫りにできるだろう。

## 2. 日中の「天人女房」の話型とモチーフ

### (1) 日本の「天人女房」の話型とモチーフ

『日本昔話通観』には、144話の「天人女房」の話が収録されているが、その中で「七夕型」が72話で最も多く、広く伝承されている話である。『日本昔話事典』において、稲田らによれば、「天人女房」は大別すると、離別型（30話）、天上訪問型（60話）、七夕結合型（105話）に分けられる<sup>11)</sup>。「七夕型」は一般的には、中国の話と同じ結末だと考えられている。しかし、語り手の描写の細かい表現の違いに留意して分析するならば、その結末について異なる解釈が可能になる。

日本の「七夕型」はいったいどのような話であるのか。大島によれば、日本の「天人女房」は結婚、離別、再会、破局の四つのモチーフを中心に成り立つものである。「その四つの組み合わせによって、結婚型、離別型、再会型、破局型の四つの亜型に分けられる。この四つの型の話では、破局型と離別型が他の二つより多くて、より自然で安定している」<sup>12)</sup>と、大島は述べている。これに基づいて、ここでは日本の「天人女房・七夕型」のモチーフを、以下のよう

- ① 男が水浴びしている天女の羽衣を隠す。

- ② 天女が天に帰れず、男と夫婦になる。
- ③ 数人の子供が生まれる。
- ④ 天女は子どもの歌を聞いて、羽衣を発見し、子どもを連れて天に帰る。
- ⑤ 夫は、天女が書き残した紙で教えられた方法で天に昇る。
- ⑥ 夫は、天女の両親が課した課題を天女の援助で成し遂げる。
- ⑦ 夫は課題の中で天女の警告を忘れて失敗し、大川に流される。
- ⑧ 夫が聞き間違えて（妻の月に一度という言葉聞き違えて）、一年に一度しか会えなくなる。

この中で、特にモチーフ⑦と⑧に注目し、『日本昔話通観』収録の各地方の話に見られる具体的な描写を考察する。

## (2) 中国の「天人女房」の話型とモチーフ

中国の話も日本のものと同様に、様々な話型がある。大別すると、君島久子が「中国の羽衣説話：その分布と系譜」<sup>13)</sup>で述べたように、日本のものと同様に「七夕型」「難題型」「七星始祖型」に分かれる。『中国民間故事集成』における「牛郎と織女」に関する話の21話を調べた。その中で数が最も多いのは漢民族の「七夕型」の話で、11話である。他の10話は1話がミャオ族の話、9話が牛郎と織女の子孫、あるいは、カササギが橋を架ける話である。「七夕型」も中国で広く伝承されている話である。筆者は中国の「天人女房・七夕型」を以下のように整理する。

- ① 牛と一緒に生活する牛郎は牛に教えられて、水浴びしている天女の羽衣を隠す。
- ② 天女が天に帰れず、牛郎に一目ぼれにして夫婦になる。
- ③ 二人の子供が生まれる。
- ④ 天帝がそれを知って、西王母に天女を連れ戻すことを命じる。
- ⑤ 牛郎が、牛衣を着て、子供を連れて追いかける。
- ⑥ 王母がかんざしで出現させた天の川が、二人を隔てることになる。
- ⑦ 王母が天女の頼みを聞き入れ、一年一度、七月七日にだけ会うことを許す。

特にモチーフ⑦について、『中国民間故事集成』に収録されている話における具体的な描写を、次で確認したい。

## 3. 「天人女房」の日中比較

### (1) ネガティブな結末とポジティブな結末

日中の「天人女房・七夕型」をそれぞれ上記のように整理すると、その最後の結末は、どちらも「一年一度再会する」になる。それ故、ほとんどの比較研究の中で、日中の「天人女房」

は同じ結末だと解釈されている。「『天人女房』と世界の類話」<sup>14)</sup>には、日本の「七夕型」の「天人女房」は、中国のものと同様、七月七日に一度しか会えない結末になると明示されている。また「中日七夕伝説における天の川の生成に関する比較研究」<sup>15)</sup>の中でも、日中の七夕伝説は同じ結末だと指摘されている。しかし、より詳細に分析すれば、中国の「天人女房・七夕型」はよりポジティブな結末で、日本の場合はネガティブな結末である点で異なることが分かる。

日本の話では、夫は天女の両親に課題を課されるが、天女の助けで成し遂げる。そして最後の課題で、夫が天女の言った通りに行動すれば、「一緒に生活できる」結果になったであろう。しかし、夫が女房の忠告を忘れたため、大きな川が出現し、二人を隔てる。この箇所について、『日本昔話通観・第9巻 新潟』では、「年に一度しか会えなくなった。雨が降って会えないときの歌に「天に七夕おいとしようんす、年に一度も会いかねる」というのがある」<sup>16)</sup>と語る話がある。『日本昔話通観・第8巻 栃木・群馬』所収の話では「妻が「月の七日に行き会おうべ」というが、夫は七月七日と聞きまちがえたので、七月七日しか会えなくなった」<sup>17)</sup>となっている。他に、岡山県の類話でも「瓜を食べたくなって割ると、みるみる大水が出て流され、「月に〔年に〕か一度は会おうぞよう」といった。それで七夕は年に一度しかない」<sup>18)</sup>と表現されている。これらの例には、天女と夫が一年に一度だけ会えるという結末に対する、もし、夫が女房の忠告を忘れなければ、このような結果にはならなかったであろうという、話者の残念な気持ちを読み取ることができる。つまり、日本の話は語り手が残念な気持ちを込めて悲しげに語っており、「一年に一度しか会えない」というネガティブな結果になる。

ところが、中国の話では、むしろ日本と逆になる。天女の親は、永遠に再会させないように天の川で夫婦を隔てる。しかし、最後には、ずっと泣いている織女をかわいそうに思って、夫婦に一年に一回会えること許す。例えば、『中国民間故事集成』の例話では、以下のように描写されている。

牛郎拉着孩子站在河边哭，哭声惊动了玉帝。玉帝见一双孩子怪可怜的，就让他们一家人每年七月七日相见一次。（訳：牛郎と子供が川の一辺で泣いて、天帝を感動させた。天帝が、子供がかわいそうと思い、彼らを毎年七月七日に会うことを許した<sup>19)</sup>。）

织女被王母娘娘捉去关了起来，日夜痛哭，众姐妹相劝也没用，众姐妹只好向王母娘娘求情，…王母娘娘见此情形，有点同情，就让他们逢七相会。叫喜鹊前去传令。（訳：織女が王母に閉じこめられ、毎日泣いて、姉妹の言葉も聞かない。仕方がないので、姉妹たちが王母に頼む。…王母が織女に同情し、二人を七日に合わせることを許し、カササギにこのことを伝えさせる<sup>20)</sup>。）

以上の表現からは、天帝あるいは王母が自分の娘に同情し、態度を変えたことが読み取れる。最初は必ず二人を永遠に別離させようとするが、最後には年に一度の再会を許すようになる。結末についても、話の中では、この「一年に一度会える」はよりポジティブに語られる。例えば、浙江省の話では、幸せな雰囲気をもって語られている。

从此后，每年七月初七喜鹊一只一只连接成桥，牛郎织女从喜鹊头顶走过去相会。两人在桥上讲讲哭哭，哭哭讲讲。（訳：これから、毎年七月七日に、牛郎と織女が橋で会い、泣きながらいろいろと話す<sup>21)</sup>。）

ここでは、牛郎と織女が泣いているが、カササギの助けで再会でき、互いにいろいろなことを話す、幸せな光景として描かれている。このような描写は他の7話の中でも語られている。これは中国の「天人女房・七夕型」がポジティブな結末になる傾向があることを示すものであろう。

その他、『日本昔話通観』によると、日本の「天人女房・七夕型」には、夫は女房が言った「月の七日、七日に会おうよねん」を「七月七日に会おうぞやあ」<sup>22)</sup>に聞き間違えたとするモチーフが、72話ある「七夕型」の話のうち、35話にみられる。これは日本の「天人女房・七夕型」がより悲しく、ネガティブな結末になる傾向があることを示すものだろう。

それ故、日本のネガティブな結末と、中国のよりポジティブな結末は、両国の「天人女房・七夕型」の間の大きな違いであると考えられる。このような異なる結末になる理由を、以下では男性の言動から考察する。

## (2) 異なる結末になる理由

日中の「天人女房・七夕型」は、結末としては同じように、別離することになった夫婦が「年に一度再会する」と語られている。しかし、日本の語り手は残念な心情を込めてより悲しく、ネガティブな結末として描く傾向がある。中国の話では、夫婦は別離したが、語り手が七月七日を幸せな日として描写し、よりポジティブな結末で終わらせようとする意図が読み取れる。語り手がこのように描く理由について、本節では男性の言動から考察する。

日本の話では、男性が天女の忠告を忘れるモチーフがあり、夫婦が離別する理由は「禁忌の侵犯」であると解釈する研究がある。例えば「中日七夕伝説における天の川の生成に関する比較研究」では、「破綻の婚姻関係に対して、禁忌はいつも重要な要素である。（中略）七夕伝説も同様、天人と人間の破局を語るには、様々な禁忌が設定されている。」<sup>23)</sup>と述べられている。しかし、筆者はこの点について再検討する必要があると考えている。日本の話の中では「瓜を縦に切るな」、「瓜を輪切りにして食うな」などの禁忌があり、男性がその禁忌を侵犯したために洪水が起きるが、「禁忌の侵犯」は男性によるものであり、男の行動が離別する直接





の畠一杯になりころがっていたシブりは、一つのこらず家に運ばれたのです。ところが、いざ切る段になってからのことです。前の主は、「親たちは、シブりを切る場合必ず縦割にせよというはずですが、そのまま切ってはいけません。必ず、横にして切ってください」というアモレの忠告に逆らって、意地悪な親たちの命令どおりシブりをたてに切ってしまったのです。すると、シブりの山がたちまちくずれ出し大洪水となって、前の主を下界に流してしまいました<sup>28)</sup>。(シブリ：冬瓜、アモレ：天女、前の主：男)

ここでは、天女が男性に瓜の切り方を教えたが、男性は、意地悪な天女の親たちに言われた通りに瓜を縦に切ってしまう。天女が言ったことが重要にもかかわらず、男性がそのとおりに行動せず、最後に別離の結果となる。そのため、日本の「天人女房・七夕型」のモチーフ⑦の具体例から見ると、夫婦が離別する結末になる責任は男性にある。忠告を忘れてしまう、我慢が足らぬ不甲斐なさ、天女の父親の意図を見ぬけぬ愚かさが不幸を招くのである。

さらに、最後に川を隔てて天女が言った「七日ごとに会おう」という言葉を、夫が聞き取れず「七月七日」に聞き間違えるモチーフも、日本の特徴である。夫の聞き違いによって、一年に一度しか会えなくなる。このモチーフについて、話の中では以下のように描かれている。

そして、それを着て、今度天に上がりよる。その時に、「七日七日に会おうぞやあ」言うて、その上がったちゅうんですな。それを間違えてなあ、七月七日と聞いて、それで七月七日が七夕はん、へえ、言うんですなあ<sup>29)</sup>。

お嬢さんが「一年に二度会おう」と言ったのに山子が「一度会おう」と言って、それから年に一度会うようになる<sup>30)</sup>。

爺は瓜を食べてしまい、大水が出る。そのとき女房は「一年に三度」と言うが、爺は「一年に一ペン」って、手を上げて流されて行った<sup>31)</sup>。

夫がまた妻に合わせてくれと神に願うと、神は「七日、七日に川を渡って会うがよい」と言うが、川音で聞きそこねて、「七月七日に会うのか」と問い返し、が「そうだ」と答えたので、夫は一年に一度、七月七日に妻と会えるだけになった。この大川が天の川で、夫婦は七夕の星になって天の川をへだてて向かいあって光っている<sup>32)</sup>。

これらの話の中では、夫が女房あるいは神様の「七日に会う」と言うのを「七月七日」に聞き間違えている。例えば、「それを聞き違えてなあ」という表現には、悲しい、残念だという心情がよく読み取れる。また、男性が女房の「一年に何度も会う」ことを断る話もある。

だから仕事に行って、やっていたら喉が渴いてしようがないで、そういわれたけれど一つとって切って食べたら、それからトントントン水が出て、なかなか止まらなかったって。そのうちその人が流されて行ってしまったってな。だから家の天女が行ってみたいけどおらんとしたら流されて行ってしまって、えらい川に行ってその向こうに流された人がおったの。「月に一度、七日の日に木を浮けるようにしてくれ」と言ったら向こうにいる男の人は「危険があって、月に一度はとても無理だから年に一度、七月七日に木を浮ける」というわけで約束して、それでその日に雨が降らば会えると言って、それが男の人が乗ったのがひこ星で女の方が織姫と言って、二人の星が向かい合うという話だかな<sup>33)</sup>。

この話では、天女が夫と月に一回会いたいと言うが、夫は危ないと思ひ断っている。この臆病な男性からは妻に会いたいという強い心情が感じ取れない。以上の具体例を通して、男性が天に追いかけても、天女の忠告を忘れて、あるいは自分の失策や臆病さで夫婦別離という結果になるのを見てとれる。それ故、日本のネガティブな結末になる主な原因は、夫の落ち度に帰する。

一方、中国の話では、「禁忌の侵犯」ではなく、親の干渉で夫婦が離別する結果になる。中国の話においては、以下のように描写されている。

织女下凡三年了，在天上是三天，到了第三天，王母娘娘还不见织女回去，就下来找，王母娘娘把织女抓走了。牛郎干活回来，只见俩孩儿哭，不见织女，抬头一看，织女已飞到半空中，牛郎就穿上牛头鞋，用挑子一头挑一个孩儿，撵啊，他穿着牛头鞋，不知不觉飞了起来。眼看快撵上了，王母娘娘取下头上的银簪子，在身后划了一道儿，划出了一条天河，隔开了牛郎织女。（訳：織女が人間世界で三年間を生活したが、天では三日間に過ぎない。三日目、王母は織女がまだ戻ってこないことに気づき、人間社会に降りて織女を捕まえて、天に連れ戻した。牛郎が野良仕事を終え、家に帰ったら、織女の姿が見えなかった。天を見ると、織女が空の中に飛んでいるのが見えた。牛郎は素早く牛の皮で作った靴を履き、子供を二つの籠に入れて織女を追いかける。もうすぐ織女に追いつこうというとき、王母が銀のかんざしを抜き、線を引いて天の川を作り、二人を別つ<sup>34)</sup>。）

不料这事终于被王母娘娘知道了，他很生气，牛郎扔下锄头，穿上靴子，一手拉一个孩子腾空就追。眼看就要追上了，王母娘娘拔下头上的金簪照脚下一划，一条波浪滔滔的大河出现在牛郎面前。（訳：このことが王母に知られて、彼女は非常に怒った。牛郎は農具を捨て、靴を履き、二人の子供を連れて天に追いかけた、追いついたとき、王母が金のかんざしを抜き、天の川が牛郎の目の前に現れた<sup>35)</sup>。）

天上一日，地上一一年，六姐妹回到天宫已有两日，王母娘娘查出织女还没有回天宫，不觉发火了，马上派天兵天将前去捉拿织女回宫。眼看牛郎就要追上织女了，王母娘娘拔出一支银簪向天空一划，随即成了一条天河，刚好在牛郎织女中间，夫妻儿女四人，隔条天河，他望望哭哭，她也望望哭哭。（訳：天での一日は地上での一年である。他の姉妹が天に帰ってきてもう二日間たつが、織女がまだ天に戻ってこない。王母はそれを知って激怒し、天兵を派遣し、織女を天に連れ戻す。牛郎が織女に追いついたとき、王母がかんざしで空に線を描くと、まさに牛郎と織女の間で天の川になった。織女と牛郎と子供は天の川で隔てられ、互に見つめあいながら泣いている<sup>36)</sup>。）

可这一切都被王母娘娘发现了，她恼怒地从脑后拔下金钗，在牛郎与织女之间一划，顿时，天空中出现了一条波涛汹涌，白浪滔天的银河。从此，牛郎与织女，就只能一个在河东一个在河西遥遥相望了。他们被阻隔在了银河的两岸，望眼欲穿，悲痛万分。（訳：これは王母に知られ、かんざしで牛郎と織女の間に一線を描くと、空に天の川が出現した。その後、牛郎と織女が川の両側に立って互に見つめあっている。二人が銀河に隔てられて、とても悲しいことになってしまった<sup>37)</sup>。）

これらの描写において、織女は自分から天に帰るのではなく、王母あるいは天帝に、強制的に連れ戻される。牛郎も織女と別離したくなく、すぐ子供を連れて天まで追いかける。その上、牛郎と織女が銀河で隔てられても、すぐにはあきらめず、銀河の両側に立って見つめあいながら、懐かしさを伝える。二人が別離しなければならない悲しさが読み取れる。したがって、夫婦が離別する結果になる主な理由は、織女の親の干渉であるといえる。日本の話の中では、父親が男に難題を出すのが、離別の直接的理由にはならない。牛郎と織女は親の干渉に対し、家庭をしっかりと守ろうとする心情があるからこそ、親を感動させ、「一年に一度再会を許される」というポジティブな結末になる。

### (3) 日中の「天人女房・七夕型」における男性像

以上見てきたように、日本の話においては、天女が男性に、西瓜を食べる、あるいは取ると、大水が出ると忠告したにもかかわらず、男が西瓜の香りに我慢できない、あるいは一個くらいなら取ってもいいなどの理由で、西瓜を食べたり取ったりする。また、天女が男性に瓜の切り方を教えるが、男性は天女の親の意図を見抜けずに親の指示どおり瓜を切ってしまう。さらに、女房が言った「月に一回会う」を「年に一回会う」と聞き間違える。この不甲斐なく、愚かな男性の行動があるからこそ、日本の「天人女房・七夕型」がネガティブな結末になるのだろう。しかし、中国の話では、牛郎と織女を別離させるのは織女の親である。家庭が破壊される時、男が自分の身分より高い織女の親に勇敢に立ち向かおう、家庭をしっかりと守ろうとする心情が

読み取れる。それ故、中国の話はポジティブな結末になるのだろう。

そのほか、日中の話の中の男性は同じように「七月七日に会う」と言われるが、中国の話では、牛郎は地上に帰るのではなくて、銀河の一边に立ち、織女と見つめあい、会える日を待つ姿が描き出される。日本の方は男性が地上に落ちる姿が多くみられる。この男性像の比較を通し、日本の情けが薄い男性像と中国の情けを重んじる男性像の違いが明確になる。

以上、日本の「天人女房・七夕型」において語り手は、不甲斐なく、愚かな、情けが薄い男性像を描く一方で、中国の話では語り手は、勇敢な、情けを重んじる男性像を描写していることを明らかにした。

## おわりに

日中の「天人女房・七夕型」の結末が同じとされるが、語り手が具体的にどのように描くかはそれぞれ異なる。日本の語り手は「天人女房・七夕型」を悲しげで、ネガティブな結末に描く傾向がある。その一方で中国の場合は、幸せで、ポジティブな結末が描かれる傾向がある。その違いを男性の言動から見ると、日本の話では、天女の忠告を忘れ、天女の言葉を聞き間違えうという失態をおかし、夫婦別離する結果になる。しかし、中国の話では、牛郎と織女が親に干渉されて別離になるが、家庭を守るために織女の親の反対に抗い、ポジティブな結末をむかえる。日中の男性の行動の比較を通してみると、日本では不甲斐なく、愚かな、情けが薄い男性像が描かれ、他方中国では勇敢な、情けを重んじる男性像が描かれる。

本稿では、主に『日本昔話通観』と『中国民間故事集成』における「天人女房・七夕型」を対象としたが、他の資料での語り手がどのように「七夕型」を語っているのかについては、今後の課題としたい。また、語り手が男性の場合と女性の場合ではどのように表現が異なるかについても留意する必要がある。そして、日中の「天人女房・七夕型」が表す男女像が、他の話型の話でどのように表現されているかを検討することも次の課題として挙げておきたい。

## 付記：

本稿は、アジア民間説話学会第16回国際学術大会（2019年11月17日、立命館大学大阪いばらきキャンパス）での口頭発表の原稿を加筆修正したものである。会場、その他においてご教示賜った先生方に感謝申しあげる。

## 注

- 1) 稲田浩二 1988『日本昔話通観』全巻 同朋舎出版。
- 2) 『中国民間故事集成』全国編集委員会 2002『中国民間故事集成』,中国 ISBN 中心出版。北京巻、吉林巻、四川巻、江蘇巻、河南巻、浙江巻、海南巻、甘肅巻、福建巻、天津巻、寧夏巻、山西巻、広西巻、江西巻、河北巻、湖北巻、湖南巻、貴州巻、遼寧巻、黒竜江巻、西藏巻、広東巻、山東巻、新疆巻、内

蒙古卷。

- 3) 黄地百合子 2019 「昔話に登場する女性像」日本昔話学会『昔話—研究と資料—』47号三弥井書店, pp. 39-53。
- 4) 大久間喜一郎 1972 「七夕説話伝承考」『明治大学教養論集』75号, 明治大学教養論集刊行会, pp. 1-22。
- 5) 篠田知和基 2007 「「天人女房」と世界の類話」『Hiroshima Journal of International Studies』第13巻, 広島市立大学国際学部, pp. 93-119。
- 6) 野口芳子 2011 「昔話のなかの女と男」日本昔話学会『昔話—研究と資料—』39号, 三弥井書店, pp. 84-87。川森博司 2011 「日本昔話における女性像の特質—男女逆転型からの照射—」日本昔話学会『昔話—研究と資料—』39号, 三弥井書店, pp. 117-128。
- 7) 野口、前掲論文。
- 8) 川森、前掲論文。
- 9) 張方円 2014 「漢族四つの民間故事における男性像とその理由についての探求」『金田』第4期, pp. 76-79。
- 10) 張揚 2010 「日中民間故事における異類婚姻譚の話の比較」『西安社会科学』第28巻第2期, pp. 120-121。
- 11) 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久 1994 『(縮刷版) 日本昔話事典』弘文堂, pp. 621-622。
- 12) 大島建彦 2004 『日本の昔話と伝説』三弥書店, pp. 26-39。
- 13) 君島久子 1967 「中国の羽衣説話：その分布と系譜」『藝文研究 (The geibun-kennkyu: journal of arts and letters)』24号, pp. 20-42。
- 14) 篠田、前掲論文, pp. 93-119。
- 15) 楊静芳 2012 「中日七夕伝説における天の川の生成に関する比較研究」『学校教育研究論集 (25)』東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科, pp. 69-84。
- 16) 稲田浩二・小澤俊夫 1984 『日本昔話通観・第9巻 新潟』同朋舎出版, p. 275。
- 17) 稲田浩二・小澤俊夫 1986 『日本昔話通観・第8巻 栃木・群馬』同朋舎出版, p. 241。
- 18) 稲田浩二・小澤俊夫 1979 『日本昔話通観・第19巻 岡山』同朋舎出版, p. 298。
- 19) 中国民間文学集成全国編集委員会 1998 『中国民間文学集成・福建巻』編集委員会『中国民間故事集成・福建巻』中国 ISBN 中心出版, p. 214。
- 20) 中国民間文学集成全国編集委員会 1997 『中国民間文学集成・浙江巻』編集委員会『中国民間故事集成・浙江巻』中国 ISBN 中心出版, pp. 301-302。
- 21) 中国民間文学集成全国編集委員会 1997, p. 302。
- 22) 稲田浩二 1999 『日本の昔話 上』筑摩書房, p. 266。
- 23) 楊、前掲論文, p. 76。
- 24) 稲田浩二・小澤俊夫 1981 『日本昔話通観・第11巻 富山・石川・福井』同朋舎出版, p. 235。
- 25) 稲田浩二・小澤俊夫 1982 『日本昔話通観・第4巻 宮城』同朋舎出版, p. 310。
- 26) 稲田浩二・小澤俊夫 1978 『日本昔話通観・第17巻 鳥取』同朋舎出版, p. 240。
- 27) 稲田浩二・小澤俊夫 1978 『日本昔話通観・第21巻 徳島・香川』同朋舎出版, p. 11。
- 28) 稲田浩二・小澤俊夫 1980 『日本昔話通観・第25巻 鹿児島』同朋舎出版, p. 116。
- 29) 稲田浩二・小澤俊夫 1978 『日本昔話通観・第16巻 兵庫』同朋舎出版, p. 250。
- 30) 稲田浩二・小澤俊夫 1978 『日本昔話通観・第18巻 島根』同朋舎出版, p. 350。
- 31) 稲田・小澤 1978 『日本昔話通観・第17巻』, p. 241。
- 32) 稲田浩二・小澤俊夫 1981 『日本昔話通観・第12巻 山梨・長野』同朋舎出版, p. 190。
- 33) 同書, p. 188。
- 34) 中国民間文学集成全国編集委員会 2001 『中国民間故事集成・河南巻』編集委員会『中国民間故事集成・河南巻』中国 ISBN 中心出版, p. 390。
- 35) 中国民間文学集成全国編集委員会 1998, p. 214。
- 36) 中国民間文学集成全国編集委員会 1997, pp. 301-302。
- 37) 劉、前掲書, p. 15。

## The Male Images and the Endings in Japanese and Chinese Tales of “tanabata”

ZHANG Yu

Japanese and Chinese tales of “*tennin nyōbō*” (a heavenly wife), have various types. I will take the type “*tanabata*” as the research subject. It has been believed that Japanese and Chinese versions have the same endings: the man and his wife meet on the seventh of July every year. However, by examining the details of the tales, we recognize that the Japanese tales end sadly and negatively, while the Chinese tales end happily and positively. The difference is in how the men act and what they say. Therefore, this article focuses on these differences. Comparing the narrators’ specific descriptions of the men’s actions and words will clarify that in Japanese tales, men are shiftless, silly, and coldhearted, whereas, in Chinese tales, they are brave and compassionate.